

Title	<書評>『ニューエクスプレス・ベンガル語』丹羽京子（著），2011年，白水社．A5判，本文159頁，CD付き，定価：3000円+税
Author(s)	藤原， 敬介
Citation	印度民俗研究． 12 P.89-P.108
Issue Date	2013-03-30
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/50057
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

書評

『ニューエクスプレス・ベンガル語』

丹羽京子（著）, 2011年, 白水社.

A5判, 本文 159 頁, CD 付き, 定価: 3000 円 + 税.

藤原 敬介

目次

1. はじめに
 2. 著者について
 3. 本書の背景と構成
 - 3.1 本書がかかれた背景
 - 3.2 本書の構成
 4. 内容の検討
 - 4.1 「文字と発音」について
 - 4.1.1 発音記号はすべての単語に表記してほしい
 - 4.1.2 五十音図をうまく活用してほしい
 - 4.1.3 潜在母音の説明がうまい
 - 4.1.4 「母音調和」にはふれてほしい
 - 4.2 文法について
 - 4.2.1 動詞の活用形を網羅的にあげている
 - 4.2.2 説明がときにわかりにくい
 - 4.3 語彙について
 - 4.3.1 知識人を意識している
 - 4.3.2 東西ベンガルのちがいに配慮している
 5. さらにベンガル語をまなぶために
 - 5.1 教科書
 - 5.2 参考書
 - 5.3 辞書
 6. おわりに
- 附録 正誤表
- 参考文献

1 はじめに

評者は『エクスプレス・ベンガル語』でベンガル語¹をまなんだのち、ベンガル語を媒介言語として、バングラデシュ・チッタゴン丘陵に居住するチベット・ビルマ系諸民族の言語を研究するようになった。そして縁あって、2011年10月から大阪大学外国語学部でベンガル語の授業を担当している。授業では『ニューエクスプレス・ベンガル語』も使用している。評者は、著者以上に熟読していると自負できるほどに、エクスプレス・ベンガル語シリーズのお世話になってきた。

二十年の歳月ののち大幅に改訂された本書は、著者である丹羽京子氏の長年にわたるベンガル語教育経験にささえられた好著である。だが、愛読者というものは身勝手にも、大幅な改訂によって改善された点を歓迎するとともに、おしまれてならない、削除された項目の復活をねがうという、いいとこどりをしたがるものである。

本稿では、教室での学生からの疑問・質問をふまえ、前著『エクスプレス・ベンガル語』と比較しながら、本書を批判的に検討してみたい。今後再版されるに際し、改訂上の一助となればさいわいである。

2 著者について

本書の著者である丹羽京子氏は、本稿執筆時点（2013年1月）では、2011年10月に東京外国語大学に新設されたベンガル語学科の専任教員である。東京外国語大学で長年にわたりベンガル語の非常勤講師をつとめてきただけでなく、2004年には東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所での言語研修におけるベンガル語講師もつとめた。丹羽氏の専門はタゴールをはじめとするベンガル文学であり、丹羽[2011]に代表される著作もある。

ベンガル語教育についての著書としては、東京外国語大学教授・町田和彦氏との共著である前著『エクスプレス・ベンガル語』[町田・

¹ 「バングラ語」と表記するほうがより原語の音に忠実であるけれども、本稿では日本語での慣習にしたがって「ベンガル語」と表記する。

丹羽 1990] ²のほか、前述した言語研修の教材として丹羽 [2004a, b]、丹羽・ハック [2004] がある。

3 本書の背景と構成

3.1 本書がかかれた背景

前著『エクスプレス・ベンガル語』と比較して、本書で格段に改善されている点は、ベンガル文学の専門家である丹羽氏の文学的センスが、随所に発揮されていることである。会話文の量が大幅にふやされたと同時に、内容的にも、文化・文学・買物・観光など、学習者を退屈させないさまざまな話題があつかわれ、現地でのくらしの具体的な生活体験にもとづいた実用的で機知にとみ、いきいきとした表現がとりあげられている。

また、近年、西ベンガルだけでなく東ベンガル（バングラデシュ）の現代文学をも精力的に研究しているという丹羽氏自身の最近の研究動向を反映して、インド側のベンガル（西ベンガル州）だけでなくバングラデシュをも会話文の舞台としてとりあげているのはとてもいい。

バングラデシュではなされるベンガル語は、標準的（と一般的にいわれる）コルカタのベンガル語とは発音・文法・語彙にわたって、若干、ことなるが、そのことについても、本書ではきちんと言及されている。

コルカタのベンガル話者は、えてしてバングラデシュのベンガル語を「なまり」としてけなす傾向がある。だが、ベンガル分割をへて半世紀以上（60年以上）を経過して、いまや東側のベンガル語が独自の発達をとげつつある。さらに近年のバングラデシュにおける経済的な活況を理由に、日本人がビジネスでバングラデシュをおとずれる機会が増加しつつある。このような状況を考慮すると、バングラデシュのベンガル語を積極的に再評価しなくてはならない時期にさしかかっているのではないか、とおもわれる。

² 2004 年には同内容のものが『CD エクスプレス・ベンガル語』 [町田・丹羽 2004] として再版された。

3.2 本書の構成

本書はベンガル語の入門書である。白水社からでていた他のエクспレス・シリーズとおなじく、本書も全二十課からなる。

表紙をひらくと、みかえしの頁にベンガル文字の筆順がおおきく、わかりやすく通覧できるようになっている。そして、はしがき、文字と発音の説明とつづき、本課がはじまる。

各課は四頁からなり、はじめの一頁にその課で学習する文法事項をふくんだ会話文がある。二頁目には新出単語や重要表現があがる。三頁目と四頁目で文法事項について説明がなされる。学習事項はやさしい内容から徐々にむずかしい内容へとすすむよう、よく工夫されている。

二課ごとに練習問題が二頁ついており、既習事項を確認しながら学習できる。前著では巻末にまとめられていた練習問題の解答が、本書では練習問題とおなじ頁におかれている。解答をさがす手間をはぶき、総頁数をへらす効果もある。単語リストの直前にCDを録音した母語話者からのメッセージをつけたこともあわせ、ニューエクспレス・シリーズでの新機軸である。

ニューエクспレス・シリーズの方針として、「単語力アップ」および「表現力アップ」という頁が数課ごとにおかれてもいる。巻末には本書にでてきた語彙をほぼ網羅した単語リストもついている。かぎられた頁数のなかでこれだけの内容を取捨選択して配置した著者の手腕はあざやかというよりない。

4 内容の検討

ベンガル語は、たとえばヒンディー語と比較しても、習得がかなり簡単な部類の言語である。名詞や形容詞に文法的性がなく、数にしたがって複雑に変化することもない。能格構文のようにややこしい構文も存在しない。たとえカタカナ発音をしていても、実用的には十分である。日本語と語順もかわらない。「～してみる」とか「～しに行く」といった表現方法までそっくりである。基本的な動詞や助詞さえおぼえてしまえば、あとは英単語をほどほどにまぜていても、それなりに通じてしまう。

学習者にのこる難関は、みつつしかない。すなわち文字と発音、動詞の活用、そして基本語彙の習得である。本節では、特にこの三点を中心に、本書を検討してみたい。

4.1 「文字と発音」について

4.1.1 発音記号はすべての単語に表記してほしい

ベンガル語をおしえていて苦労することは、学生がなかなか文字を暗記してくれないということである。ひらがなやカタカナはもとより、漢字もローマ字も自由につかいこなせるにもかかわらず、基本字母にかぎればわずか 40 文字程度しかないベンガル文字に苦戦している。ヒンディー語をまなび、デーワナーガリ文字を苦もなく解する学生たちでさえ、ベンガル文字の習得には苦労している。

評者の経験からいえば、文字を習得するには、実際によくつかう単語をただしい発音とともに学習する必要がある。初学者はそもそも単語も発音もしらないので、教科書にはすべての単語に発音記号をつけることがのぞまれる。前著では、附録の単語リストにはすべての単語に発音記号がついていた。だが、本書では発音記号がなくなってしまった。本書でもっとも残念な点は、まさにこの点にある³。

4.1.2 五十音図をうまく活用してほしい

文字を習得するには、実際に辞書をひいて、該当する単語をさがしだす練習も有効である。辞書をひくには、ベンガル文字がどのような原理で配列されているかについても、効率よく学習する必要がある。

前著にしても本書にしても、もちろん文字について必要最低限の説明はしている。文字の一覧表をあげ、調音点ごとに整理している。日本語の五十音図をベンガル文字で表記するとすればどのようなようになるかまで、提示している。ただし、五十音図まであげるなら、もう一歩ふみこんで、五十音図がインド系文字の配列と密接な関係にあることまで説明してほしかった。そうすれば、辞書での配列で母音記号があら

³ ついでながら、せめて会話文には音声記号もつけてもらいたかった。第十課までにあるカナ表記ではなく、『エクスプレス・チベット語』のように音声記号を全課につけるか、『エクスプレス・ビルマ語』のように音声記号を巻末にあげてほしかった。

われる順番が基本的には「アイウエオ」の順番であること、子音字の配列は「アカサタナ」の順番に準じているといったことが容易に理解されるはずである⁴。言語の学習に際しては、すでにして知っている知識を最大限に活用することが重要である。

4.1.3 潜在母音の説明がうまい

さて、ベンガル文字と発音との関係で学習者がもっとも苦勞する点は、子音字に母音記号がつかないばあいに潜在母音は [ɔ] となるか [o] となるかという点と、母音記号として ৓ があるばあい、[e] であるのか [æ] であるのかという点である。学習者が両者のちがいをなかなか理解できない原因は、日本語ではどちらも「オ」や「エ」として発音され、ベンガル語でおなじように発音していても実用的には通じてしまうあたりにあるようだ。

しかしながら、実用的に通じるとはいつても、ベンガル語の音体系を理論的に理解しておくことは重要である。このような観点からいうと、本書での説明は前著からいちじるしく改善された点もあれば、残念ながらおよばない点もある。

まず改善されている点について指摘したい。それは潜在母音の音価についての説明である。本書ではきわめて実践的な説明があたえられている。本書での説明を評者なりにまとめると、(1) のようになる。

- (1) 潜在母音が発音されるならば、第一音節では [ɔ]、第二音節では [o] となる⁵

⁴ 付言すれば、ঢ় /co/ [tʃɔ] 「チョ」が五十音図では「サ行」に対応することは自然な音変化である。バングラデシュのベンガル語では ঢ় がしばしば [so] と発音される。日本語でも「太郎さん」が「太郎ちゃん」ともよばれうるのが想起されよう。প্ৰ /po/ [po] 「ポ」が「ハ行」で対応することも、日本語のふるい発音が、[h] ではなくむしろ [p] にちかかったことをしめす傍証ともなる。このように、他言語の学習をとおして、母言語のしくみをみつめなおす機会がもてることも、言語学習の効用である。

⁵ 丹羽 [2011: 20] における説明は、ここまで明確になされているわけではない。丹羽氏の説明を評者なりに解釈すると、このようになるということである。

前著での説明は、もうすこしくわしいものであるけれども、本書での説明のほうが簡潔である。

たとえば খবর /khobor/ 「ニュース」という単語のばあい、前著では「同じ母音 [o] を含む音節が連続することはない」（町田・丹羽 1990: 24）という解説がある⁶。また、 দেহ /deho/ 「体」という単語のばあい、「語末が হ のばあいは [ho]」（町田・丹羽 1990: 23）と解説されている。さらに前著では特に解説はないけれども、たとえば এখন 「今」という単語の発音は /ækhon/ である。すなわち、第二音節にある潜在母音が [o] となっている。このように、前著ではばらばらに説明されていたことが、本書ではひとつの単純な規則にまとめるところまで到達している。これは画期的なことである⁷。

4.1.4 「母音調和」にはふれてほしい

ベンガル語文法を考察する上で無視できない「母音調和」⁸について、前著ではくわしく解説されていた。だが、本書ではまったく解説されていない。「母音調和」は個々の単語の発音について重要であるだけでなく、動詞の活用を正確に身につけるためにも理解しておくべきものである。

ベンガル語における「母音調和」とは、(2) のとおりである。

(2) 高母音 ([i] および [u]) に先行する [o] や [æ] は、それぞれ [o] と [e] で実現する

たとえば কঠিন 「むずかしい」という単語は、(1) の規則からは

⁶ 評者はこの説明をみて、同種の音が連続することをさけるという「異化」がベンガル語にあるのではないかと推測した。しかしながら、「異化」では説明できない環境でも [o] となりうることを考慮すると、(1) のほうが説明力がたかい。

⁷ ベンガル語の潜在母音の音価および後述する母音調和について簡明かつ十分な説明は Sarkar [2009: xi-xvi] を参照。

⁸ 言語学の立場からいえば、「逆行同化」というほうが実態に即している。「逆行同化」とは、後続する音の影響により、先行する音が変化するというものである。しかしベンガル語学業界では「母音調和」といいならわされているようである。そこで本稿でも「母音調和」としておく。

[kɔ̃thin] となることが予想される。しかし「母音調和」の規則が優先され、母音 [i] の影響により、実際には [kɔ̃thin] となる。あるいは এক
「一」は単独では [æk] と発音される。これが একটু「すこし」となると、母音 [u] の影響により、[ektu] と発音されるようになる。このように、「母音調和」が (1) の規則に優先するということを考慮することにより、[ɔ] が [o]、[æ] が [e] と発音される環境を完全に予想することができる。

さらに、「母音調和」の条件を知悉することにより、動詞が活用するさいに高語幹にかかわることが理解しやすくなる。たとえば一人称現在形をみると、次表のように語幹母音が変化しているのは、一人称の語尾である [i] の影響であると説明されれば、わかりやすい。こうすれば、[ɔ] は [o] に、[o] は [u] に、[æ] は [e] に、[e] は [i] に変化する、などと個別に変化を暗記する必要がなくなり、相対的に一段階上の母音に変化すると理解しておけばよくなる。

表: ベンガル語動詞の活用と母音交替

タイプ	動名詞 (基本形)		一人称現在形 (高語幹)	
1	করা	[kɔra]	করি	[kɔri]
2	শোনা	[shona]	শুনি	[shuni]
3	দেখা	[dækha]	দেখি	[dekhi]
4	লেখা	[lekha]	লিখি	[likhi]

4.2 文法について

4.2.1 動詞の活用形を網羅的にあげている

ベンガル語文法でもっとも重要なのは、動詞の活用を習得することである。著者はこのことをつよく意識している。前著では、比較的よく使用する動詞の活用についてのみ表にされていたにすぎなかった。これに対して本書では、動詞の活用タイプを七種類にわけ、どの時制の活用についても七つの活用タイプを表にしてあげたところに工夫のあとがみられる⁹。要領のよい学生は、すべての活用表をコピーしてま

⁹ ただし、もうすこし丁寧に説明してもらいたかったところが一点ある。「タイプ 6」の動詞のなかで活用のさいに ই が挿入されるものについて、

とめ、自分用の活用表を作成していた¹⁰。

4.2.2 説明がときにわかりにくい

本書での説明は基本的に丁寧であり、初学者をよく意識している。しかしながら、説明がわかりにくくおもえる部分もあった。具体的には (A) ~ (D) にあげる四箇所である。

(A) 「দেওয়া」は「あげる」「もらう」両方の意味で使います」という説明がある (p. 49)。しかし、দেওয়া /dewa/の本義はあくまでも「あげる・あたえる」である。日本語にしたときに、一見「もらう」と訳せるようにみえることはある。たとえば সে আমাকে টাকা দিয়েছে /she amake taka dieche/ というベンガル語があれば、文字どおりには「彼はわたしにお金をあたえた」という意味である。これを意識すれば「彼はわたしにお金をくれた」とか「わたしは彼からお金をもらった」としうる。評者の観察では、視点を「あたえ手」におくか「うけ手」におくかによって、日本語訳が「あげる」になるか「もらう」になるかという相違にすぎない。このように訳しわけうるからといって、ベンガル語の দেওয়া そのものに「あげる」と「もらう」の両方の意味があるわけではない。

(B) 「存在未来は থাকা でも代用できます」 (p. 55) という説明がある。ところが、該当箇所に具体例として থাকা /thaka/ を述語とする例があがっていないため、初学者にはわかりにくい。

本書では「গাওয়া (歌う) など一部の動詞」という説明がなされている (p. 54, 64, 70, 82)。前著では、もうすこし網羅的に該当する動詞があげられていた。すなわち চাওয়া「欲する」、নাওয়া「沐浴する」、বওয়া「運ぶ」、সওয়া「耐える」である [町田・丹羽 1990: 54]。これらすべてをあげる必要はないとしても、চাওয়া /cawa/「欲する」は、গাওয়া /gawa/「歌う」よりは使用頻度がたかく、重要である。なお、教師にとってはどの動詞がどのタイプに属するかは自明であるものの、初学者には判断がむずかしい。したがって、単語リストにあがるすべての動詞について、どのタイプに属するかを明記したほうが学習者にはやさしい。

¹⁰ ただし、ここでもひとつ欲をいえば、活用表では発音表記も併記してほしかった。前頁の表中「タイプ1」と「タイプ3」でしめたように、ベンガル文字ではおなじようにかかれても、高語幹では発音が変化するからである。

(C)「所有格のいろいろな使い方」(p. 103)において *দরকার* /*dorkar*/「必要だ」という単語についてのべている。例文として *আমার টাকা দরকার* 「わたしはお金が必要だ」があがっている。そして、この単語が否定でもちいられるばあい *নেই* /*nei*/がもちいられるとし、「その際の構文に注意してください」という説明がある。例文としては *আমার অত বেশী টাকার দরকার নেই* 「わたしにはそんなにたくさんのお金は必要ありません」があがっている。両者を比較して、どこがどのようにに相違しており、「構文に注意」すべきであるかという点が、学生にはわかりにくいようであった。

注意すべき点としては、二点がおもいうかぶ。ひとつは否定辞が動詞述語文でもちいられる *না* /*na*/でなく、存在否定でもちいられる *নেই* /*nei*/である、というものである。おそらく著者の意図はそこにあっただろう。

もう一点は、例文において「必要」の「対象」となっている *টাকা* /*taka*/の格である。すなわち、肯定文では「お金」にあたる *টাকা* /*taka*/が主格であらわれている一方、否定文では *টাকার* /*takar*/と所有格であらわれている点が気になる¹¹。もしもこの点に「注意」すべきということであれば、それも明示的に記述していただきたかった¹²。

¹¹ 本書における当該箇所でも問題となっている「所有格」は、いわゆる「意味上の主語」（ここでは「わたし」）が「所有格」であられるという点である。そこに異論はない。評者がここで問題としているのは「必要」の「対象」となる名詞がどのような格形式であられるか、ということである。

¹² ただし「肯定文と否定文とで「必要」の対象となる名詞が別の格であられる」といった記述をしているベンガル語の文法書を評者はしない。

本書の例文をみるまで、*দরকার* を述語とする文では、肯定文であれ否定文であれ、対象の名詞は主格であられるものと評者はおもっていた。なお、ベンガル人言語学者によれば、通常は肯定文でも否定文でも所有格をもちいるということであった。肯定文で主格をもちいる場合は、たとえば「(時間は必要ないが)お金が必要」というように、対比していることが含意される、ということであった。評者には「疑問文のこたえ」となるばあいにも、主格であられるようにおもわれる。たとえば *তোমার কি দরকার* /*tomar ki dorkar*/「君には何か必要か」に対するこたえ

(D) 条件分詞をもちいた二重否定の例としてあがるベンガル語の例文が、日本語訳と対応していない。তোমারও ওখানে না গেলেই হয় (p. 118) という文は、ベンガル語そのものとしてあえて解釈するなら、「君がそこにいきさえしなければいい」とでもなる。日本語訳としてあがっている「君も行かないわけにはいかない」にちかい内容をベンガル語で表現するならば、তোমারও ওখানে না গেলেই হয় না とでもいうべきであろうか。ただし母語話者によると、そのようなベンガル語は不自然であるということであった。この (D) の例だけが、本書にあがる多数のベンガル語例文のなかで、ベンガル語そのものとして不自然に感じられ、日本語訳とも対応しないものである。

4.3 語彙について

本書はかぎられた紙幅のなかに、日常的によくつかう単語をうまくとりこんでいる。そのほかにも、ややむずかしい点があるけれども、学習者が記憶しておいて損はない情報ももりこまれている。具体的には以下にのべる二点である。

4.3.1 知識人を意識している

本書の特徴として、通常の入門書ではあまりふれられないような単語をあえてとりあげたところが散見される。評者には、(A) ~ (B) にあがる二点が新鮮であった。

(A) 「後置詞の使い方 (2)」 (p. 75) にあげられている বিনা /bina/ 「～なしで」。この単語は文語としては後置詞の用法がある¹³。だが、評

は、主格であられる。

দরকার は文法的には名詞であるから、先行する名詞が主格であれば、全体としては主題となる名詞に述部となる名詞が後続しているとみることができる（「お金が必要」）。他方、先行する名詞が属格であれば、全体としてより緊密にむすびついた名詞句をなしているとかんがえることができる（「お金の必要」）。後者は দরকার のあとにさらに動詞が後続するばあいにもちいられるようである (p. 119 の যদি তোমার টাকার দরকার থাকে 「もし君にお金の必要があるなら」も参照)。

¹³ 後置詞としての用法は、サンスクリット語に原典があるような戯曲において使用されるきわめて特殊なものである。なお、人をあらわす名詞が先行

者であれば、現代ベンガル語において存在する唯一の前置詞という面を強調したい。前置詞としての用法では、たとえば *বিনা কারণে* /bina karone/ 「理由なしに」というように、後続する名詞がかならず場所格であられる。

(B) 「もちろん」という意味でもちいられる *বৈকি* /boiki/ (p. 100) や「(もちろん、確かに) ~だ」(p. 129) にあげられている *বটে* /bote/。評者はこれら単語を会話のなかで耳にしたことはない。しかし、文学ではよく目にする表現であるから、ベンガル文学を専門とする著者としては、いれておきたい表現なのだとおもわれる。

このように、本書には文語形式がときにみられる。これらの形式をしっていると、知識層を相手にベンガル語で会話したり作文したりするばあい、教養のあるところをみせられるかもしれない。

4.3.2 東西ベンガルのちがいに配慮している

前著と比較して本書は「バングラデシュのベンガル語にもより気配りし」(p. 3) ている。とりわけ、インド・西ベンガル州とバングラデシュにおける親族名称やよびかけ詞をとりあげたところは重要である。ベンガル人はすぐに「家族は何人いるか」、「結婚しているか」などと親族名称にかかわる質問をしてくるからである。

ただし、本書でいう「西ベンガル」と「バングラデシュ」のちがいは、より正確には「ヒンドゥー教徒」¹⁴と「イスラム教徒」のちがいに相当する。つまり、西ベンガル州でもイスラム教徒は「バングラデシュ」のように語彙を使用するし、バングラデシュでもヒンドゥー教徒は「西ベンガル」のように使用する。また、「おじ、おば」については「父方と母方」さらに「東西」によって語形がことなるという説明をあたえながら (p. 78)、具体的な単語が掲載されていない。とくに「おじ」にあたる *চাচা* /caca/ (東) は、血縁関係にある「おじ」ではな

するばあい、その名詞が目的格 *কে* /ke/ であられると説明されているけれども、適当な例を評者はしらない。

¹⁴ さらに厳密に言えば、「ヒンドゥー教徒」に代表される「非イスラム教徒」というべきだろう。キリスト教徒や仏教徒、あるいはイスラム教徒ではない少数民族も、「ヒンドゥー教徒」とおなじように親族名称をもちいる。

くとも、年長の男性に対して ভাই /bhai/ 「兄さん」とならんでバングラデシュではよく耳にする。日本語で「おじさん」とよぶようなものである。

親族名称のようにイスラム教徒とヒンドゥー教徒のちがいにより語彙がことなるという問題とは別に、バングラデシュとインド・西ベンガル州とで語形に微妙な差異がある単語が散見される。そのような単語があった場合、本書では西ベンガル州の語形が優先的にあがっている。バングラデシュでの語形も併記すれば、より網羅的な記述となってよかったのではないだろうか¹⁵。

5 さらにベンガル語をまなぶために

『エクスプレス・ベンガル語』ではさらに学習をすすめるひとのために有用な辞書や参考書があげられていた [町田・丹羽 1990: 6]。しかし『ニューエクスプレス・ベンガル語』では、紹介そのものが割愛されている。そこで、最近出版されたものを中心に、ベンガル語学習に有用な教科書・参考書・辞書などを評者から紹介したい。

5.1 教科書

本稿でもたびたびふれた『エクスプレス・ベンガル語』 [町田・丹羽 1990] は、インド・西ベンガル州のベンガル語を重視しているものの、いまなお有用な教科書である。音声の解説がくわしく、附録の単語リストには音声記号もついており便利である。ただし『ニューエクスプレス・ベンガル語』の出版にともない、入手困難となった点がおしまれる。必要に応じて図書館などで参照することをおすすめする。

アザド & スルタナ [2005] は、独習者には不親切な点があるけれども、豊富な例文とともに実際的なベンガル語がまなべる好著である。詳細は藤原 [2011] にみられる書評を参考にしてほしい。

英語がわかるひとには、Radice [2010] をすすめる。会話文も例文もたくさんあるので、全体をよんで練習問題をすべてこなすのは大変で

¹⁵ 評者の目にとまったかぎりでは、頻繁に使用される単語のなかでは、以下にあげる二例が東西で語形がことなる。

বিকেল /bikel/ (西: p. 50) vs. বিকাল /bikal/ (東) 「午後」

ঘুমোনো /ghumono/ (西: p. 81) vs. ঘুমানো /ghumano/ (東) 「ねむる」

あり、発音を意識した文字転写にはいささか煩雑な面もみられるけれども、やりおえたあかつきには、確実にベンガル語の実力があがるだろう。

Nasrin & van der Wurff [2009] は口語重視の教科書であり、ベンガル語が基本的にはすべて音声表記されている。どちらかというとなングラデシュのベンガル語を重視しているようであり、日常的によくつかう表現も満載されている。なにより、会話であつかわれている題材が現地ではなじみのあるものばかりで、おもしろい。文字をおぼえる気がない学習者には便利かもしれない。しかしながら、未習事項でも容赦なく会話文にでてくる点と、附録の単語リストを参照してもでてこない単語が大量にある点がおしまれる。

5.2 参考書

ベンガル語の文法書としては、最近 Thompson [2010] が出版された。この文法書は全体で 800 頁もある浩瀚なものであり、ありとあらゆる文法事項が網羅的に記述されている。例文が豊富であり、語彙索引と事項索引も充実している。例文のベンガル語に音声記号がついていない点が残念であるけれども、現在のぞみうるもっとも有用な参考書である。

日本語で閲覧するのに便利な解説としては、奈良 [1992] がある。ただし記述は専門家むけであるから、初学者にはむずかしい。

5.3 辞書

ベンガル語の辞書についてくわしくしりたいひとには丹羽 [2008] を一読することをすすめる¹⁶。本稿では、丹羽 [2008] にあがっていないものを中心に紹介する。

先に紹介したベンガル語文法の著者である Thompson 氏は簡便な語彙集も出版している。Thompson [2011] はベンガル語の見出し語すべてに文字転写を附すだけでなく、単語によってはバングラデシュで多用されるか、インド・西ベンガル州で多用されるかまでしめしており、

¹⁶ 丹羽氏による東京外国語大学の学生むけの「ベンガル語辞書案内」も参照：<http://www.tufs.ac.jp/library/guide/biblio/dictionaries/biblio.bn.pdf> (2013年1月23日閲覧)。

きわめて有用である。『ニューエクスプレス・ベンガル語』の語彙集に発音記号がついていない欠陥をおぎなうものとして、現在一番におすすめできる語彙集である。

Thompson [2011] は入手が容易で便利ではあるけれども、小型の語彙集であるから収録語数がすくない。よりおおくの語彙を掲載した中型辞典としては、バングラデシュのベンガル語については Ali et al. [1994] を、インド・西ベンガル州のベンガル語については Bhattacharya [2000³] をすすめる。Ali et al. [1994] には、外来語の語源が何語であるかという情報が（対応する原語の形式までは記載されていないけれど）ついているのが便利である。

ベンガル語を学習していくうえで、発音辞典は必須である。入手しやすいところでは奈良 [1986] に基本単語 1500 語すべてにたいして発音記号がついている。より本格的にはインド・コルカタからでている Bhattacharya [2003] がおすすめである。発音が音声記号で表記されているからである。バングラデシュからは Biswas [1999²] がでている。ただしベンガル文字で発音が表記してあるので、初学者にはむいていない。

なお、日本人むけに日本語と対照した語彙集として竹内・ラフマン [2010] がある。すべての語彙にベンガル文字表記、ローマ字表記、カナ表記がついており、対応する英語も附されている。ただし評者からみると、かならずしも適当ではない形式も散見される。ローマ字表記やカナ表記の方針も一貫しているとはいいがたい。

ベンガル語については残念ながら『旅の指差し単語帳』が正式には出版されていない。ただし、安達淳哉氏が個人的に作成している『ベンガル語指差し単語集』があり、無料でダウンロードできる¹⁷。短期の旅行者には便利であろう。

6 おわりに

以上、『ニューエクスプレス・ベンガル語』を批判的に検討してきた。こまかい部分の指摘がおおかったのは、本書が全体としてはよくでき

¹⁷ Google などで「ベンガル語」「指差し」と検索すればでてくる。

た教科書であり、批判すべき点がほとんどなかったということの裏がえしでもある。内容面からは、日本語でかかれたベンガル語教科書のうち現在も入手が容易で、初学者にも比較的わかりやすく、記述が信頼できるベンガル語教科書としては、本書の右にでるものはない¹⁸。

著者が本書でものべるように、こまかいことはあまり気にせずに「おおらかに」(p.9) 学習するならば、評者がのべたような批判はとるにたらないものではある。けれども、近年みられる旅行者むけの会話本とは一線を画する本書であるからこそ、おおらかさのなかにも厳密さがもとめられている。

ところでベンガル語には口語体とは別に、動詞の活用や使用語彙がより複雑な文語体も存在する。本書を通じて初級をおえた学習者には、文語体まで学習できるような中級の教科書と、日本語による詳細な辞書が必要となるだろう。東京外国語大学にベンガル語学科が開設された今こそ、日本におけるベンガル語学習環境のより一層の充実が急務でもある。

本書がおおくの学習者をみちびき、やがてその学習者のなかから、さらによりよい教科書を執筆し、辞書を編纂するような人材があらわれることを期待したい。

¹⁸ アマゾンで「ベンガル語」を検索すると、竹内・ザカリア [2010・1890 円]、アザド & スルタナ [2005・2730 円]、竹内 [2011・1785 円] のつぎに本書があがる(2013 年 1 月 30 日現在)。これは人気がある順番であるとともに、概して値段がやすい順番でもある。教科書自体の出来を反映したものではない。もしも本書が『ニューエクスプレス・ヒンディー語』なみに 2415 円程度で発売されていたら、人気にも変化があったはずである。

とはいえ、アマゾンにあがるレビューをみれば、一般読者が何をのぞんでいるかはよくわかる。発音が簡単にわかり、こまごまと説明せず、値段がやすい教科書ということである。端的に言えば、学習するにも入手するにも気楽な教科書ということになる。

附録

附録として、評者が気づいた誤記・誤植の類をあげておく。

該当箇所	誤 (修正すべき対象)	正 (修正すべき内容)
p. 12	ムルドン・ノ	ムルドンノ・ノ
p. 12	ドントン・ノ	ドント・ノ
p. 13	軟口蓋茎音	硬口蓋音
p. 17	songe	sh onge
p. 18	bhromon	bhromoṇ
p. 18	dhannobad	dhonnobad
p. 19	somuddro	sh omuddro
p. 20	boro	borọ
p. 20	samne	sh amne
p. 22	jigyasha	jig gasha
p. 23	IV, 4、③	IV、4、②
p. 23 「叫び」	ঙ + গ = ঙ	不要なので削除
p. 23 「突然」	জ্ + ঞ = জ্	不要なので削除
p. 43	মাস্টার মশাই	p. 149 では মাস্টার মশাই
p. 73	এই যে	単語リストにはない

参考文献

- [1] 竹内 僚 (たけうち・りょう) . 2011. 『バンガラ人もびっくり! 超簡単ベンガル語学習』七海交易.
- [2] 竹内 僚 (たけうち・りょう) / タシン・ザカリア. 2010. 『会話重視! ベンガリを話そう 第二版』七海交易.
- [3] 竹内 僚 (たけうち・りょう) / アシフル・ラフマン. 2010. 『単語帳ベンガリを覚えよう』七海交易.
- [4] 奈良 毅 (なら・つよし) . 1992. 「ベンガル語」, 亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典・第3巻世界言語編(下-1)』三省堂, pp. 967-977.
- [5] 奈良 毅 (なら・つよし) 編. 1986. 『ベンガル語基礎 1500 語』大学書林.
- [6] 丹羽京子 (にわ・きょうこ) . 2004a. 『ベンガル語の基礎』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- [7] 丹羽京子 (にわ・きょうこ) . 2004b. 『ベンガル語語彙集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- [8] 丹羽京子 (にわ・きょうこ) . 2008. 「ベンガル語」, 石井米雄編『世界のことば・辞書の辞典 アジア編』三省堂, pp. 290-298.
- [9] 丹羽京子 (にわ・きょうこ) . 2011. 『タゴール』清水書院.
- [10] 丹羽京子 (にわ・きょうこ) , ミール・モンズルール・ハック. 2004a. 『ベンガル語会話集』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- [11] 藤原敬介 (ふじわら・けいすけ) . 2011. 「書評: 『基礎からはじめるベンガル語学習』」『遡河』16: 63-66.
- [12] 町田和彦 (まちだ・かずひこ) , 丹羽京子 (にわ・きょうこ) . 2004. 『CD エクスプレス・ベンガル語』白水社.
- [13] ムンシ・K・アザド/ムンシ・R・スルタナ. 2005. 『基礎からはじめるベンガル語学習』国際語学社.
- [14] Ali, Mohammad et al. 1994. *Bengali-English dictionary*. Dhaka: Bangla Academy.
- [15] Bhattacharya, Subhas. 2000³. *Bengali-English dictionary*. Kolkata: Sahitya Samsad.

- [16] Nasrin, Mithun B. and W. A. M. van der Wurff. 2009. *Colloquial Bengali*. London and New York: Routledge.
- [17] Radice, William. 2010. *Complete Bengali*. London: Teach Yourself.
- [18] Sarkar, Pabitra. 2009. *The modern Bengali dictionary for non-Bengali readers, Vol. IV*. Kolkata: The Asiatic Society.
- [19] Thompson, Hanne-Ruth. 2010. *Bengali: a comprehensive grammar*. London and New York: Routledge.
- [20] Thompson, Hanne-Ruth. 2011. *Bengali (Bangla) practical dictionary: Bengali-English/English-Bengali*. New York: Hippocrene Books.
- [21] বিশ্বাস, নরেন (Biswas, Naren) . 1999². বাংলা উচ্চারণ অভিধান (A Dictionary of Standard Bengali Pronunciation) . ঢাকা (Dhaka) : বাংলা একাডেমী (Bangla Academy) .
- [22] ভট্টাচার্য, সুভাষ (Bhattacharya, Subhas) . 2003. বাংলা উচ্চারণ অভিধান (Bengali Pronouncing Dictionary) . কলকাতা (Kolkata) : সাহিত্য সংসদ (Sahitya Samsad) .